翻訳という世界

船越 隆子（翻訳家）

ふなこし・たかこ　1957年、徳島市生まれ。東京大学文学部英文学科卒。訳書に「夕光の中でダンス～認知症の母と娘の物語」「ブレイキング・ポイント」や「スコット・フィッツジェラルド作品集　わが失われし街」（共訳）など。NHKのドキュメンタリー番組など吹き替え翻訳も手掛ける。

多彩なジャンル　小説に直訳は禁物

〈1〉

「翻訳」と聞いて、まず思い浮かべるのは？　米国のミステリー小説、ヨン様で話題になった韓国ドラマ、大スペクタクルのハリウッド映画、それとも、ドストエフスキーやヘミングウェーなど世界の名著？

そう、ひとくちに翻訳と言っても、いろいろなものがある。

小説やエッセーなどの読み物、学術論文、解説書や契約書など一紙に書かれたものだけでも、そのジャンルは多彩で、訳し方も千差万別。たとえば小説と契約書では、180度違うと言ってもいいくらい。

翻訳の勉強をしていたころ、先生が言った。「小説やエッセーを訳すときには辞書の言葉は使わないこと」。えーっ！　辞書を引いてもその言葉を使わないなら、どうやって訳すの？

困惑したが、つまりは、辞書で調べた言葉をそのまま使うのでなく、自分で紡ぎ出した言葉で表現しなさいということだった。

文芸ものの翻訳では、英語の力というよりむしろ日本語力が試される。

けれども契約書などの実務翻訳では、辞書の言葉をなるべくそのまま使うように心がける。訳文の美しさより、正確で分かりやすいことが求められるから。

映像の翻訳となると、またさらに話が違う。

ナレーションやせりふを翻訳して吹き替えや字幕にするには、時間や字数といった制約が加わってくる。

テレビで放送される海外のドラマや映画は、日本語に吹き替えられていることが多い。

登場人物が、本当は英語をしゃべっているはずなのに、吹き替えた日本語に口の動きがぴったり合っていて驚いたことはないだろうか。そこがまさに翻訳者の腕の見せどころ。せりふの長さを合わせて、その人物らしい口調に訳した上で、可能なかぎり口の動きも合うようにする。

私も長年、海外のドキュメンタリー番組の吹き替え翻訳を担当していたことがあるけれど、翻訳原稿ができると、ヘッドホンで音声を聴きながら、画像に合わせてブツブツとつぶやき、せりふの長さの確認をしたものだ。

字幕の場合は、さらに職人技となるだろう。

字幕は、吹き替え翻訳ほど長い日本語は使えない。耳からでなく目で見るものだから、人の目が追うことのできる文字数に制限されてしまうのだ―それは、1秒間にたったの3文字。

たとえば5秒間のせりふであれば、15文字ということになる。5秒は短いようでいて、しゃべるとなると結構たくさんの言葉を盛り込める。

でも、字幕ならそれを15文字にしなければならない。もし、せりふに名前が入っていて、それが「ショスタコビッチ」さんとか「グレチェンスキー」さんだとしたら、もうそれだけで8文字使ってしまう。お手上げだ。

そこで、せりふの中で、この物語の展開に必要な情報だけをピックアップし、15文字にまとめる。名前はどうする？　俗称などで短く表すとか、ただ「彼」にしておいて、前後で分かるようにする工夫するとか。

字幕は制限文字数と格闘

私も昔、修業がてら映画やドラマの字幕翻訳を少しさせてもらったことがある。けれども、長いせりふを短い言葉にする字幕作りは、まるでパズルのような作業。1行をひねり出すのに、一日中考えたこともある。でもそれだけに、ピタリとはまる言葉を見つけたときには、ひそかにガッツポーズも出る。

つまりは、その物語や番組の趣旨をどう解釈するかで、字幕は違ってくる。面白くなるもつまらなくなるも、字幕の出来にかかっていると言ってもいい。

映画などを見ていると、たまに「あれ、しゃべってる英語と全然違う。誤訳じゃないの」と気づくことがあるだろう。でもそれは、場面の状況やその人物の性格を鑑み、翻訳者が意図的にせりふとは違う訳をつけている場合もある。そう思って見れば、映画をまた違ったふうに楽しめるかもしれない。

ただ、どんな翻訳にも共通して言えるのは「本来、翻訳は愚子である」ということ。目立たず、邪魔にならないのが一番いい。翻訳されたものであることをつい忘れて、夢中で読んだり見たりしてもらえれば、それこそ翻訳者冥利に尽きるというものだろう。

◇

徳島市在住の翻訳家船越隆子さんに、翻訳の魅力やエピソードなどを、翻訳歴25年の体験を通してつづってもらう。

映画の対訳シナリオや名言集もたくさん出版されている。原語と照らし合わせてみると面白い発見があるかもしれない